里見八犬傳 拾 四編 卷廿二

709
81

遠へ門
號 709
巻 81

明治二六年十月九日

南總里見八犬傳第九輯巻之三十二

東都　曲亭主人編次

第百五十回

憲重憲儀聚兵使を同くせ　行包在村忠奸諫を異ふす

復説箕田馭蘭二根角谷中二宍栗專作們ハ近村より來る莊客をヨヌく斫仆し或ハ搦捕まるのミ有種並ふ穂北の里人ハ往方も知ざるゆゑ日の功ゑを怕れて隊の兵毎ふ下知し〻既ふ死しる近村児五六名を尚燃残る火の中へ一箇一箇ふ投入さきく思ひの隨ふ焼しる其首を皆斫會まるふ其頭ふ一口の大刀の燔刃ありければ是究竟の東西とそ首級と共ふ會持芳勝興三聲揚させ當晩五鼓の左側ふ五十子の城ふかゝ〻ふければ隨即吵え上るゆゑ臣ゆる傾ふ路を急ぎて穂北へ推寄芳ひよ有種並ふ那里人们ハ世智人が搦捕られしを吵知りて免れ〻ゑ

思ひけん里の家毎に自焼して逃亡るゝ力及ばぬ逃後れる奴毎に搦捕らゐ死開ぶ中に有種の家の焼迹に自滅の屍骸五六個あり又その中に一人腹を斫るあり是必有種ならんと思ひ合へば生拘の逆徒に見せ合ひ皆燔熾りゐるを分明なりと稟せども其亡骸の邊なる灰を埋れる大刀あるをのそ猜ゐに大々ゐ是有種ゐゐん因て御実検をねがはんと実事に怪しゐ洪へて有司に其五六級の首と燔るる刃と遞與けるあれども燔首あれば実検に及ばぬ怪而次の日根角谷中二ヶ箕田駅蘭二と俱に主君定正に見参を定正則谷中二ヶ今番の功を誉さるゝ且恩命あり今より忍岡の城に退るゝ故の如く城の頭人なるべし因て完栗専作を谷中二のゐに隷て他をも忍岡へ遣さん間常に士卒を敬言めて宜く非常に備ふべし但去逆徒有種なる首級い虚実分明なるざる故に權且梟首の笑に及ばぬ然ば世智介と刹木八自餘の逆徒も刑罰といそべくるを異日倘有種に似る者を搦捕るゐ

あらば他なるゝ誰らよく真と贋を知る者あらん當城に穂北へ遠ゐ則件の罪人ら們を谷中二に汝に預けて忍岡の城に領て紛く那里の牢舎に閉籠措て猶も餘類を穿鑿せよと言叮寧に課ゐれば谷中二は欣然と言義をあり退て隨即完栗専作に館の仰箇様々と宣示し准備へそせて却獄吏ら世智介並に刹木八夫婦と自餘の生拘児們を皆受合ゐく故の忍岡隷ゐ走卒奴隷に牽せ俱に五十子の城を退て忍岡へそゐ程に妻恋阪の頭を東に下る時前面ら人連立て来く這方へ来ゐあり是則別人ゐゐ那穂北の近邸ゐ荘客の郷に駅蘭二谷中二們ゐ與に或に斫殺され或に結柏られて五十子の城へ牽れ者の宅養に逃ゐ言邑人に事低々と呼知て且哀み且怨に堪ざれば俱に五十子の城に参上る事を兎枉を訴て生拘れる良人弟兄を拯合ゐんと商量あるる其訴訟児二三十名村正を先に立て来て谷中二們に逢ひゐ件の邑人の宅養毎に良人弟兄叔姪の面ゐと驚く

縛られて相牽るを見るに堪ざるを何故ぞとなるに其妻児子は前後もこそで携
て粘々歎哭べ其餘の谷中二们の去向を塞ぎ寃を叫びて倶に云云に訴るを谷中
二ゝ耳も被げず眼を瞪らし聲苛立く這奴们甚大胆の法度を怕れざ上を蔑
ゝ這罪人ども中途ゝ奪畧まく欲するに問でも有種ぐ支黨ゝに疑ひ
る。搦捕ねと喚れば従ふ走卒奴隷ゝ羼り凶と答へも果ぎ勢ひ悍く走る鬼て裂
蹴仆し毆伏せて囚索被る幷ぐ中に多く餘る者れば作刀を拔晃めて撃に
せと罵懲ゝ權威に勝よりも益壯佼の脚疾に忽地撥と逃去て非理非法に
遇ぬぞ只老ると婦幼のゝ結初られて泣叫ぶを追立ゝ新舊共に忍岡の城へ牽
りく来て死囚牢に入れうけ。恁而根角谷中二ゝの次の日宛栗專作と五十子の
城へまゐらせて昨日又中途ゝ有種ぐ支黨を率て搦捕ひゝ其交名を注進ゝ皆
是筋る誣言るゝ定正蔑くして竟に悟らぎ連に功あるとして猶ゝの後も心を

屬さ追捕ひらく懈るべらぐと掟く專作に遷されて然ば件の邑人们は一ゝび帰ゝ二
ゝびまぞ非法の緝捕に良人を殺され弟兄牢舍に繫れるを怨ゝ其寃を又訴く
欲まれども先度に懲て果しに敢ぞ陰に叛く心あるも疋夫に東八州の管領に盾衝く
術のあらざれば打歎くのみ。猶餘殃の這一郷に係ゝを幸ひけりとまう孫に思返して默止
ける。現乱世とは云ひながら上に法の守るるに下に然の遣る方るに今倘古にも孔子あらば又春
秋を為ん欲と識者は嗟嘆に堪ざりけり。介程に扇谷修理大夫定正は憎ゝ思ひ
道節信乃毛野等の八犬士の在る所及河鯉の政木孝嗣のるまでも今番詳に知
てそ怨に堪ざれば左さる右さるの思を為る。稍思ふるるあれば素より當家に屬城
ありける。大塚へ使者を遣して城主大石石見守憲重其子源左衛門尉憲儀父子と
五十子の城へ招ひとして閑室に面談を當時扇谷山内両管領に四個の大夫
あり。長尾大石小幡白石是ゝ。これを管領の家の四老とも又持資入道道灌あ

ア。長尾景春と共ニ扇谷の大夫之因て長尾御田又臣焉田ニ作る。を内管領と唱ふ。の中小幡白石ハ山内顕定の家臣ゟ長尾も素是山内の家の元老ゟ景春年来顕定と不和ゟ故ニ遂ニ定正屬られども又叛て獨立の志あり。定正これを後悔して君臣の和順既ニ成るのゟ景春ハ今も尚上野白井ニ在城して。ゟ五十子へ出仕せず。又持資入道灌い文武の達人當家の軍師忠誠稀ゟ良臣ゟれい。定正の行ふ所ヨヽく道ニ違ふの故ニ屡是を諫ゟふ野水舟横りて言竟ニ容られず。説者の為ニ身も亦危く伍子胥ガ眼を東門ニ掛け屈原湨父の辭を為ゟ心ニ似ゟる時ハ。あれば竟ニ病着ニ假托て。其子薪六郎助友と倶ニ相撲の糟谷の城ニ在り。忠魂義胆移ゟふゟれど。勢ひかゝの如くニあゟれば久しく出仕せざりけり。間話休題。然ば又定正ハ去の日大石憲重憲儀ニ宿恨の事ゟ方ゟ事の顛末を告て安ゟ豫ゟ防ゟれし如く那道節信乃毛野川の八犬氏ハ當家の怨敵刑餘の乱賊罪死を

容ざる者ゟふ里見義成是を扶持して。敢隣國の好を思ひ。又我舊臣河鯉孝嗣ハ怨言不忠の罪あるとて。是義ニ死刑ニ行ふと。あける折。亦那悪犬氏の一人也。犬江親兵衛仁義喚做を兇少年ガ神出鬼没の幻術とて。其日の実撿使根角谷中二雨麗廉ゟを愚ニ考。則孝嗣を捕て上總へ走て里見の與ニ戰功あり。其後孝嗣ハ結城也。早漏の川ニ陷りて死ゟとも。或ハ恙ゟとも。或ハ恙ゟとも。ゟの義ハ。ゟ日穂北の郷士落點餘之七有種ガ老僕世知ゟ人と喚做を奴と搦捕りける。ゟ事發覚れ且有種も亦悪八犬士支黨ゟ。ゟ。ゟ。ゟ。緝捕の士卒を遣せ。ニ穂北の賊民皆自焼して逃亡ゟる。欲死去ゟる。欲宗徒の屍骸ゟとへども。燔首ゟれば分明ゟ。約莫かの如ク悪黨の我封内ニ横行ゟ。隙を覘ひ虐を施して。年来里見の間者ニ做ゟ。我ニ冠せて暴行機変ハ皆義成ゟ使ニ所問ゟして知ゟ。死の。抑義成の父里見義実ハ素是吉嘉吉の亡人ゟ。ニ安房へ流寓ゟ。ゟ。山下定包を討滅して神餘の迹を横領して。滿呂安

西を欺殺して四郡を併呑あるを義成も亦奸雄也。其箕裘を兼ねしより上總を略
去て總国をも已に半國併あり。尚飽くを知らざる欲。敢當家を謨らずして先に
人を征し。後るゝを征せらる。今倘斧鉞を用ひざる竟に子孫の患を做さんと思へども。
我孤力也。一朝に本意を遂ぐる難し。於是再思惟るに山内顕定は是同宗の管領也。
譬へば車の両輪の如し。然るに不合のあるは一旦確執に及ぶ。親族反て讐敵の
思ひを做すことあり年あり。是より以來我威德左に右に如意なるを羨む者間これあり。過て
改るに憚ることなれといへり。先や顕定と和睦して両家魚水の思ひを做さば當家の武威
復振て関の八州の大小名頭を舉て我下風に立んとせば願ふべけれ。我と顕定両大將也。
從ふ諸侯男士を率て里見を一舉に討滅し。憎しと思ふ悪犬氏を一個も漏さず生拘
ふ。八劍に做まるゝ豈快らずや。我主張は只是の一意見もあるべからずと勢ひ猛
く談れば憲実頭を低く其子憲儀と侶共に聽果て答る曰。誠に以ある君の御

賢慮。山内殿と御和睦の一説。臣等も豫幾に所當家愈御敏意目の基本也。
ひへけれと祝せば憲儀も亦宗目今兼りひとく両管領の御連署をもて諸侯を催促做
ふ。八州の列侯誰か亦敢不の字を書ん者や。先を爭ふ安房上總の五十餘城を
立地に降さんの石を鶏卵を壓するも易し。憎は那悪犬士なり。猛雄の就中大阪毛
野は鰲目御前の怨敵。又大山道節は我君を射たり。旦臣等は光當黒仁田山晋吾を惨く
殺す。怨あり。剛又犬塚信乃は當城へ乱入して人を屠り粟を竊む。剰辟書して辱
めなりとる。狡猾憎むに餘りあり。今番里見を御征伐の御催は宜に理の當然に孰か
異名の軍とのん。早く鎌倉へ御使を仰付さるべかり。この義敬要なるべけれと相槍打て
いそぐべし。定正快然として頷て既に各同意なるべ敢て思ふ及ぶべからず。石見は明日鎌
倉へ赴く。宜く顕定に談ずべし。顕定我と同意して俱に里見を伐んとせば甲斐の武田
相摸の三浦は招ずとも来會せん。その他近國の諸大名石濱の千葉自亂に素より

当家の旧方へ又下總の千葉孝胤及結城成朝常陸の左武高久鹿嶋又滸我の御所成氏主上野の長尾景春〈源左衛門憲忠〉廻勤して合戰の義を談ぜべ。顕定合體をたゝん欲。滸我の御所も恨を思ひて必や従れん。又越後片貝の服大刀自い女流乗れども義勇あり。且故夫人蟹目前の田多ふたの義を告ぎ恨ゝられん。片貝並ふ白井〈〈箕田駅蘭二〉〉を遣さんとの義を先よくあるべよと言送もるく宣示せば憲重憲儀言義して倶ふ大塚の城へぞ退りける。低而去の次の日ふ大石石見守憲重い伴當ヨヲく従へて鎌倉へ赴く程ふ口い一宿して第二日の朝巳牌時候ふ山内る管領顕定の邸ふ造りて那家ゝ權臣る齋藤左兵衛佐高実ふ對面を請て那説を云云と告てふ。寛恭君の情願別義ふあらも一族不和い家門の恥へ當館顕定合體あふ今よる兵を合ーカ。勢志倶ふ里見と討滅して且悪八大士を虜ふせ宿怨を復もぐ。安房上總を等分ゝ迭ふ數郡を加領せんとの義御同意してんぬ近國諸侯の大軍と合して征伐をいそべ。

修理大夫定正を詠の意衷かくの如ー。宜く仰上げゆ給と。詞を低くー利ふ誘ふ辯論詳ゑー。かゝ。高実都てあるるて。躯ゝ退ゝて奥ふ赴ゝ。則主の顕定ふ扇谷殿の使者大石憲重ゞ口状固様ゝゝと那意を具ふ告ーゝ。顕定是をうち歩て先高実の意見を問ふ。高実答て然ンい。扇谷殿當家ふ叛ゝ。軍威振ゝ。諸侯離ゝ。只管領の名あるのみ。管領の威勢るー。然ゝ里見を恨る為ふ干戈を動まく欲ゝれども。自力ふ及ゞくゝけれゝ。詞を低くー礼を篤くあて。當家の資助ふ憑ゝらまくも其利ハ反ゝ當家ふ在り。今其和睦を饒。合戰して倶ふ里見を滅ーゝ。兵權愈當家ふ帰ゝ。起さんとも臥させんとも館の隨意ゝべけれ。且耳ゝ且萬れゝ顕定連ゝふうち點頭て其説我思ふ所と相同ゞ然ゝ憲重ふ對面せん。先其准備をいそぐべ。とふよ高実欲ゝ美て又客房へ赴ゝけり。苟且て顕定ハ礼服を装ひ近習を従へて正廳ふ出て来ゝ。躯て上坐ふ着ゝーゝ。老黨弱黨齊ゝと左右二側ふ

憲重使〳〵顕
定の第ふ到る

あき定

貞秀

侍りさろ。登時齋藤左兵衛佐高実ハ大石石見守憲重ヨ案内を者引て主君の見参ニ入れーるに顕定則坐を賜ふ。憲重ハ答ふ。既ニ高実をもて告しれ。修理殿定正の来意別議ーー。両家和睦の義ハ我願ふ所也。且里見義成と征伐のるも。其謂ハ。両家合體ー。且近国の諸侯と率て倶ニ里見と討滅さば。遂ニ北條長氏も。脱て陣門ニ降らんあらんハ。八州平治ーて永く同宗の親を失ハ。欲し是ニ優ものあらんや。我近比日ヨ六郷まで出陣ー。那川の上ニ倶ニ拙言て異論るくハ則五十子の城ニ入て諸隊の軍配を定むべー。罷帰りて是等の義を宜く修理殿ニ伝へてよ。大義ニこそと。労ふ。親名刀一口を憲重ニ取ー。其後饗食饌を薦めらる。伴の士卒ニ至るまで山海の珍味をもてせ。酒飯の儲ニ乏しからぬもるければ。憲重主僕欣びて倶ニ拜謝ー。歇舎ニ退りて。次の日帰路ニ赴く程ニ。又一宿ニて。第二日ニ草く五十子城ニ帰り。隨即主君定正ニ見参ーて。山内殿の応答箇様〻〻と。和睦同意の事。及両家合體の旗旌を。諸侯を連ねて水陸ニ。里見義成を伐ん云々。喧聞

支ての餘の所要も恁々と。漏さず反命をる。語次ニ然ーも那里の歇待のいと厚ーよさ。告て首尾の宜ーを祝せーば。定正満面ニ笑れる。其歇びのいとうもあらず。則憲重を労ふ。大塚の城ヘ返ー。其後又石濱の千葉下總の千葉辭我の成氏結城の成朝ヘ。大石源左衛門尉憲儀を使者ーて。里見征伐の義を徇知る。定正顕定両管領の連署ーて。軍兵を催促。又常陸の左武鹿嶋白井の長尾糟谷の御田片貝の服ヘ。其田駅蘭二ト有功の老黨を使ーて出陣を促。其ニ急ーて。中ニ長尾御田服大刀自ハ扇谷ニ従事の大夫。或ハ定正の故夫人蟹目前の母。れハ違背あるべくもあらず。又石濱の千葉自胤ハ封内廣ーて。且扇谷の管領ニ附庸の小諸侯る。ふ大阪毛野大田小文吾のるあれば。今那虎の威を借ー。萩昌益を雪人と思ふければ欣びて其催促ニ従ひけり。又甲斐の武田信昌相模の三浦

義同へ顕定より相徇らる。然れども這両諸侯い北條長氏の獸さる城と離れく。遠く来會さべら庇。或い嫡子或い親族の武功ある者と大将として士卒と進らべ。と制度せられけり畢。滸我の足利成氏主い扇谷山内の両管領ふ舊怨あり。嘉吉のむり。結城落城の後成氏の両兄春王君安王君い擒とりて垂井の金蓮寺ま害せられけるふ成氏のこ恙ゐくて忠義の舊臣ふ拘養せられて世と潛びて在せり。長尾入道尚賢の父が執立まゐらせく。鎌倉ふ居ちり京都将軍義勝ふ願ひ稟まそ。則成氏を関東の管領と仰ぜられけるふ成氏父兄の怨ふ堪ぜ悄地ふ近臣と謀て。上杉憲忠と敷捕りーぐ。上杉の族起り立て成氏と攻て。鎌倉を追落ー。且成氏の乱政を室町殿義政ふ愬憲忠ふぞ。則成氏を解官まそ。上杉房顕の父を関東の管領ふ成されけり。是より成氏滸我の城ふ在り屡両上杉顕定と戰ふて。鎌倉ふ初の如く滸我の城へ逃り入るとと。既ふ七年。及ぶ成氏竟ふ顕定と和睦して陽ふ周秦の差別あるふ似れども迭ふ怨を解く由るけれ。定正も亦成氏と快らぞ。俱ふ胡越の思ひを做して事訪ふべくもあらざりけり。然が大石憲儀の是らの事の顛末とよく知りれば。詐て。今番の一戦いいぐあんと心許るく思ふめり。却已べ兄ふあらざれば伴當ヨヲく従へく。則滸我ふ赴ぜく。那御所の權臣と空えるる横堀史在村ふ對面を請ふく。里見を征伐の一議を告るふ定正の宿怨箇様々々。八犬士の事。落鮎有種の事。及河鯉孝嗣の事まぞ。都ゝ里見を非理と誣て且誘ふふ利を以て。其言果て又ふ。その戦御所も御同意ぞ。俱ふ御旗と找めぬ。憑大将ふ仰ぜまそ。凱旋の後鎌倉へ返ー居ちゃん。その戦定正が心單ゆく。敢約束仕るふあらぐ。

憲忠ハ憲実の長男上杉右京亮ト足ラ

その人成氏の時鎌倉管領の執權ラ

顕定も亦同意ゐて。連署の拙言文ゐ存りその義を以ゐ為べく御執成と請なる。と叮嚀ゐ来意と告く。件の連署と遮與ゐ在村答て示談の趣ゐ沼侍。後刻寡君ゐ申え上て。權且歇舎ゐ退て御答と俟べくと言尊大ゐ權貴と示せば憲儀則謹諾て歇店へ退る路の次ゐ又在村の宿所ゐ紆て土産代と録ゐる其白二裏と光僕ゐ遮與して在村ゐ贈りけり。低而横堀史在村ゐ件の一笑を同僚ゐ光黨甲乙ゐ告知らゐ。次の日早旦ゐ成氏の正廳ゐ出ゐ及びく在村則告稟ゐ曰。昨日扇谷定正主より来使ゐ其使者大石憲儀が口状箇様々々と言の顛末と申え上く。定正顕定の連署ゐとて。軍兵催促の檄文と拙言書と見せまゐ。まゐ成氏疑惑の眉を顰めて在村ゐ仰せるやう。那顕定定正ゐ近屬我と和睦して。權且無異ゐ似れども他ゐ心ゐ恣ゐ。君臣の礼ゐ亡るゐ今ゐ他ゐと帮助て怨ゐ多里見義成を攻伐ば義ゐ違ふべ。汝ゐいゐ思

ゐと問ゐ。大家何と答る。ゐ中ゐ一個の老黨下河邊莊司行包列を出て言ゐ。
ゐ言新考ゐ。今戰世の人心義を守ゐ稀ゐて利ゐ走ゐ者ゐ。抑扇谷定正山内顕定ゐ當家舊臣の子孫ゐ職と奪ひ地と畧ゐ我君累世の寵家ゐ背く。天の下の乱賊。ゐとして顕定ゐ量義ゐ鎌倉と逐ゐ。且管領の大職と奪ゐ返ゐ。ゐ返ゐ。ゐ近ゐ亦當城を攻落して根と断葉と枯ゐ欲ゐ。ゐ有數系ゐ實罰と思ゐ故狡稍當城ゐ返ゐ。ゐ猶胡越ゐ異ゐ。ゐ定正今ゐ里見を恨ゐ。ゐ攻伐ゐ欲ゐ。ゐ他ゐ孤力ゐ克ゐ。ゐ先顕定と和睦して且合縱連衡の古轍ゐ縁。諸侯を連ゐ。ゐ素懐を遂ゐ。ゐの故ゐ大石憲儀ゐと說客ゐて我ゐ喫ゐ大利をゐて。ゐ是豈他ゐ實情ゐ況這軍兵催促の檄文ゐ我君ゐ。ゐ編小一城の主と一列ゐ思ゐ。ゐ其非礼大不敬是ゐ甚ゐ。ゐ是ゐ似ゐ。ゐ里見氏の祖季基ゐ春王安王君の乱與ゐ結城

憲実ハ上杉宗憲基の子上杉安房守是之又清方の子憲実の弟上杉右馬門佐是之俱ホ特氏の執權を當

落城の日ホ戰死あける。忠義ハ今ホ美談とも其子義實安房へまゐりて遂ホ基を開汴よりの以来今義成の時までの年始ホハ必使者をまゐらせく。父祖の舊義を失ぬ。然るを今故ホ寃家を帮助て舊義の里見を代ゆべくもいかぞ。倘已ニ之沼ゆるぞ。安房へ加勢の軍兵を遣さるべうもやと憚る所もるく諫るを在村忌ホ推禁めて主君ホ朝ひく稟もせう目今行包の意見の如ハ其理あるホ似てのへども臣ぞ愚立ハ同じからむ。先君村氏永享ホ御滅亡ませーハ恐れぐ自業自得ぞ上杉氏の罪ホあらぬ。又当家吉の役ハ京都將軍義教の御下知ぞ。憲実清方の本意ホあらぬ。ぞ長尾尚賢ぞ君と立て鎌倉の主ホ做なりーハ則是舊悪を償んとてるホ君ハ其の義を思召さぐ。反て憲忠を害ーゆひーバ君臣亦復讎とるて今日ホ至りーホ定正里見を憎むの所以ホ則顕定と和睦合體ーて君を請ふて總大將ホ做なりて共侶ホ里見を討ぐ欲ーゆるハ是當家の大幸ぞ今自他の勢ひとりぞ其雌雄を計りホ義成愚將ホ

憲実ハ上杉宗憲基の子上杉安房守是之又清方の子憲実の弟上杉右馬門佐是之俱ホ特氏の執權を當

年落城ハ封ぜる大將

なりーハ本佐第一同ホ詳定三の清方の子これバ顕定と從父兄弟ぞ

御敵又御敵ホ作る

わるぞとぞ。八州勁勇の大兵を防ぐて勝ちーいんや。他ゲ滅亡ぬの期ホ在りぞ。今定正顕定ホ荷擔ぎ奉くく俱ホ里見を滅ーゆぐ。當家の大利則二ある。其第一ハ定正顕定先約あれバ必君を鎌倉へ還ー入れ奉りて大職を讓りまゐらせべー。其第二ハ當家の士卒戰功ゆーバ其恩賞ホ安房四郡とぞ。御領ホ做さんと仰せるとも定正ぞ其折ホ辭ひ奉るとぞ。其第三ハ六稔已前犬塚信乃と喚做を應砥児村雨丸の大刀をぞ當家舊臣の児孫と云證据ホ。仕へ願ひく推參あける。其村雨ハ贋物ホて其奴実ハ振舞陽ホ相似る。敵の刺客ぞりけれハ捕まく欲ゼーホ思ホ倍さる。燒煉ホて找む力士を砍伏ぞ。芳流閣へ逃登りく。往方ハ知ぜりホける。約莫當時の為体ハ君の知ー召ま所へ又當家ぞ獄吏ぞりける。犬飼見八も素是走卒見兵衛ぞ蝋蛉児ぞりーホ轂ぞ剣白打縅捕の扶を。よく做ぞりぞ御執立あり。獄吏ホ做されーホ那奴其職を嫌ひ稟ーて久ーくなりるまぐ

勤に就るを。剌誹謗の戯言を吐くと聞えしかバ捕へて牢舎に在らせし犬塚信乃を緝捕の與に一旦罪を饒されて芳流閣上に登せしに反て信乃を擒ハ捕ず倶に亡命して往方を知らず。其後信乃ハ行徳の客店に病臥て在りと聞えしかバその折討隊の頭人を奉りける。新織帆大夫明風が殿兵を領て那地に向ひつゝ信乃が首捕てかへり来つゝ実検に入れけれども其首ハ亦君の知召す所なるに信乃ハ稽死なる。亦那犬飼見八ハ火家の歹人七八名比皆犬をもて氏と做す者と倶に里見義成に仕て寵用せらるゝと云。その義ハ今番大石憲儀が口状を筆て聞知りけり。然バ定正主が里見を憎も征伐の事の始ハ今茲の春那信乃見八等の悪八犬氏が五十子の城に乱入せし折定正の内室の刃に伏しける怨に由れり是等情由もいへバ君扇谷殿と共に倶に義成を討滅し玉ひて信乃見八等の悪八犬氏を皆生拘らせ罪を糾して。馘り梟て世の人に示しあらバ賞罰訓正しく最愉快のことなれバ。那両大将感謝に堪ず。倶に恩義を拝戴して。復関の八州の連師と仰がせたまはん。然れバ這二の大利あり。尓るを打包がよくも思ねば生仁義に惑せなひそ。里見に加勢なしまさバ當家の士卒勇も不勇も信乃見八等の悪八犬氏と肩を比べ下風に立されて世の胡慮になるべきのみ。義成當家に冦せずといへども連年の闘戦に一度も擬兵をまゐらせず。荒年にも兵粮を調まゐらするよしもなかれバ他を伐たまふとも誰か君を不義とし。何で亦背を容る者はあらんや。當家の興廃その挙に在り。義成へ御加勢ハ物体なくこそはべれと便佞巧に説薦れバ成氏遂にその惑ひて。敢是非の再議に及ばず然らバ憲儀に對面して同意のよしを示さんとて。次の日憲儀を召よせて成氏則對面の折在村その他の老党等扇谷山内両所より言来されし里見義成征伐の事我も亦犬塚信乃等を憎しと思ふよしあれバ素より欲する所也委曲の五十子の城に造るの日面談すべしと同意の外に異議

正聽ふ成氏
両冢臣の意
見を問ふ
ゆたう丸
ちかた八七郎
ちゝみ一郎

ありうぢ
ありひら
貞秀

るゝ〜ゝ憲儀い欽び兼く来會の日を契ゝ退出く結城へ赴ゝ〜ゝ成朝ハ思ふ〜やゝりけん封内不治のゆゑとく舜ゝゆく催促ゝ従ゝ〜ゝその他千葉芦胤ち近曽老母世を去ゝく猶喪中ゝ在る故ゝ出陣克ふべゝ〜ゝとく〜ゝ亦催促ゝ従ゝ〜ゝ又常陸の左武高久鹿島ハ同意の答あるゝ〜ゝ期ゝ逮びて來會せゝ其志人の下風ゝ立んとを恥る欲然ゝ義成の良将ゝるそゆく事の成敗を量ゝ難ゝ〜ゝ欲各只その封疆を守りく遥ゝ勝負を覘ふのみ山ゝも里ゝも附ざりけり有慆れども定正ハ躬方の軍兵數萬ゆく戰飯も亦医〜ゝるゝ〜ゝ不参の諸侯を物とも思ゝ〜近日諸將の集合ふを待く諸隊の攻口を定んとく老黨有司士卒ゝ下知〜く〜その准備をぞいそぶせけゝ。

第百五十三回　毛野計を呈る八百八人
　　大命を聽く善巧方便

却説その日里見の間諜兒ゝ武藏ゝ〜ゝ来て注進の言の顛末右の如く詳ゝく且盡せるゝ〜ゝねども其大要とゝ〜ゝ〜ゝ義成是をゝ〜ゝ〜ゝその忠告の亟ゝるを言叮寧ゝ参言さるゝ恩賞ハ異日ゝ〜ゝん旦相共ゝ休息〜亦復那地ゝ出行とく恩命淺ゝ〜ゝ〜ゝけれゝ間諜兒ゝ〜ゝハ欽び拜〜亦庭門ゝ〜ゝ退出ける。當下義成主ハ次の間ゝ侍りく〜ゝる辰相清澄を召よせく〜ゝの議ゝ及びゝ程ゝ御曹司の擬所ゝ還〜せゝ〜ゝと少〜ゝ〜ゝ義成主ゝ〜ち合笑く〜ゝ〜ゝ便宜ゝ〜ゝ〜ゝ義通ハ疲労さる欽對面といそぶゝ〜ゝねども但七個の大士ゝ〜ゝゝ目今急ゝ所要ゝ〜ゝ擬衣裳の仆ゝ〜ゝとゝ〜ゝ聊も厭〜ゝ〜ゝ皆疾召ねといそぶゝ〜ゝく近習を走〜せゝ〜ゝけり姑且〜て信乃毛野道節荘介大角小文五吾現八ゝ〜ゝハ早く衣裳を更ゆ杉倉直元と共侶ゝ義通君ゝ従ゝく見参ゝ入り〜ゝ義通ハ恭〜く父君ゝ朝ひ額を傳て恙ゝ〜ゝを祝〜ゝ〜ゝ義成主ハ愛〜〜ゝ歡びの詞いく〜て是へく〜とゝ〜ゝ躰ゝ傍ゝ侍〜せゝ却七

けゝ犬士と直元ら共に人馬の調煉稍果て目今かゝる来かけるを休らはせもせで徒速に面談に及べば疲労を思はざるに似たれども這里は方僅豫武蔵の方へ遣はる間諜あり児玉ぐ五十子より帰来く注進の軍情あるを聞きもせで急ぎて招じきたる敵地の動静を問ずして小文吾先答て然いは豆裏に禀上たり一那市河に犬江屋依介の注進の義あるを快船に乗走りて昨日妙真許来て臣を諮ひしかるに比は皆共侶に徳々の地方に在りと知りて躰て猟所に尋歩り信乃現公の六個の義兄弟に対面して悄地に告げる扇谷管領の事の趣諸侯を連れて水陸より当家を伐く欲まといふ其言極く真に疑べもなく拆く人馬調煉の競猟も昨日来て果べ依介に猶御用あらん妙真許止宿して御沙汰を待ぬと示して留めいたと告れば信乃現公も亦那依介に臣ら行徳に旅宿して比に相識れる老実児をいざなひて毛野道即荘介大角ら商量仕り

いひ則毛野が一策に鷹意示せば義成天然にもく点頭て原来定正の謀る所を各既に知りて然べば詞を費さず毛野に何ぞ計らるる義あり教よ早くほと問れて毛野に阿と応て找に先聲を低うして不愚意に別議ふいぶ定正主海陸より当家を攻伐く欲まる事べ必まく船を徴め水戦に船を乗て陸戦の馬に勝れり敵に船と合られば以前に早く依介に仰付さるべく武蔵下総に在る処の小船を多く買含せ御領の海岸に維て措べ敵の輿に不便を時に在て御方に利あり或は亦市河に遣に其船を隠置べ後に用ること願べは早く依介に船の賃を賜りそ彼の義成に六郎兵庫助に且退りて有司に知て船の賃を小文吾ら請ふと義成主ら宜ふ遣與べ一の餘も所要の猶いそべ当国並に上総下総の城主諸頭人に汝ら連署の志遣脚をして那敵必寄来べ事由を徇示して海濱の

成りと固くまもり。もゝ中ゐ堀内雑魚太郎。小森但一郎浦安牛助登桐山八郎田税力助等い水陸の軍陣ゐ孰も熟ら者ゑれば別ゐ用る所ゐ。各今守る所の廳南千代丸椎津。館山の諸城ゐ權且次将ゐ譲り衛らせ。那身い皆稲村へ参りねと下知をべいあの餘ゐ明日の制度ゐあらんとまぐれ只這二椿事のまと詞委く課されば辰相清澄ら。ろゐ果く。却七犬士を労ひつゝ。船の價の多寡いも後ゐ向んと契りつゝ連立く退出る。登時又義成主ゐ七犬士をもふゝ向ひて目今毛野が策計い我既ゐ用ひしゐの他ゐ亦眼策ゐ多く敷と受ん甚麼ゐ。と問も詞も訖らぬ程ゐ道節找く出て上豊ゐ言傳聞ゐ及ども。今番扇谷定正主ゐ當家と恨ゐ水陸の大軍を起ゐ其濫觴い今茲正月廿一日ゐ臣等ゐ五十子の城と攻落て。先主先父の讎を復ゐ為と那人憎と且羞て事今ゐ既果と云依ゐ忠義ゐ風く其ゐ。ゐ。ゐ是臣等ゐ故ゐ恨と隣盟ゐ結ぜゐ其禍を君ゐ徒ゐ罪免るべゐ。ひゐ然い義兄弟ゐ

と相共ゐ骨を折り身を粉ゐ為ゐ。水ゐい大敵を殺滅ゐ陸ゐ寄隊を屈ゐ。上い我両館の洪恩ゐ報ひ。ゐ。ゐ下い房總二州の民の塗炭を拯ゐ。ゐ。ら臣等ゐ職分ゐ。他ゐ譲らぬ所ゐれども。人各ゐ。ゐ。ゐ夫謀を帷幕の内ゐ旋らして。勝を千里の外ゐ決ゐ。ゐ。ゐ智ゐ。ゐ。ゐ又堅を摧ゐ鋭を折ゐ勝を未然ゐ決ゐ。ゐ。ゐ戰へば必勝。且大敵を恐れ。ゐ。ゐ士卒を虎の像くゐ做せゐ是大勇ゐあらぬ。ゐ。ゐ敢ゐ易ゐ。ゐ。ゐ願ゐい今の筆計い毛野ゐ問せゐ。ゐ。ゐ臣等ゐ六名い其計ゐ据て。ゐ。ゐ敵を破るべ。何の御疑ひ。ゐ。ゐと憚る処もゐ。ゐ論ゐ。ゐ。ゐ莊ゐ大角小文吾現ゐ共ゐ。ゐ。ゐ議を好て。毛野を軍師ゐ做ゐ。ゐ。ゐ欲ゐ。と詞齊ゐ。ゐ。ゐ請稟ゐ。ゐ。ゐ毛野い急ゐ推禁ゐ。ゐ。ゐ開い何をいるゐ。ゐ。ゐ兵法七書い各ゐ。ゐ。ゐ又学ゐ。ゐ。ゐ足ざる者ゐ。ゐ。ゐ夫愚ゐ。ゐ。ゐ用られんと。ゐ。ゐ好と賤ゐ。ゐ。ゐ專せゐ。ゐ。ゐ欲ゐ。ゐ。ゐ聖者の誡ゐ。ゐ。ゐ所ゐ我玉智字ゐ。ゐ。ゐれども。ゐ。ゐ智者の德ゐ。ゐ。ゐ今も亦各と進退を俱ゐ。ゐ。ゐ一人ゐ任ゐ。ゐ。ゐと。ゐ。ゐ辭ゐ。ゐ。ゐ信乃い

咲紀制めず大阪辞讓ハ不忠ホ似ず。智ホ勝者ハ仁ゑれども親兵衛ハ遂ら
ねバ今日の御用ホ立ざるゝ然バ我們今和殿を薦めて軍師ホ做まく欲ずホ則
館の御為ゑ和殿も衆請の宜紀ホ従ふて辭ゐず智計を献らず則館の御為ゑの
義をゝろ紀ざる欲と解れて毛野の默然と困ゝて又ゝもホ。當下義成主ゑ之の
問答の理ハ ゑゝ欲ひ斜ゑ道節ゑふゝ向て各一致の忠信薄舉ハ思
ふ倍て最愛ず我始より毛野を軍師ホせまく思ゝかゞ他ハ年尚二十ホ
足ゝず。這ハ大士の弟ゑれバ萬一媚く思れて言紀れざるべ欲と愁ホ介意ゝて。い
まゞゑの義ホ無早ざゝホ各反て他と薦めゝ。其計ホ憑んと云大賢大度ホあゞゝ
才を媚まず能を忌ず英雄雙立者あゝんや我よかくの如ハ八個の賢臣あゝ。定
正數萬の勁兵あゝとも。そゝ一時の烏合ゑ。五侯鯖ホ似ゝるべゝ。伐破るゝ難ゝゝ。
倩れハ毛野を軍師ゝ。信乃道節即莊介大角小文吾現八を防禦使ゝ。各

辭ふべゝゝと命ゝゝ七大士ハ俱ゝ身を退ゝ額を働く。齊く言義と宣
ゝ。側聞ゑ直元ハ心悄地ゑ感ゝて已ゑ現君君ゝ臣早ゝと思ホ欲ひホ
堪ざれバ俱ホ千歳と祝ゝ。恁て又義成主毛野を身邊近く找ず。軍師ハ
逆敵と料ゝく。必欲ゝゝ其義甚麽と叮寧ゑ問ホ答て。然ハ敵ハ陸
地と宗とゑ。必近紀を貪ゝ。水路を徑ホ安房上總へ渡ゑ早く當城を捕ず
く謀る者ヨゝゝ。陸ハ行德園府臺這両熟所ホ敵と引ず。奇兵を用く
ず破ゝ易ゝ。水路ハ伏兵を用る隈ゑ。然べく居ゑゝ大敵を俟べゝゝ。
必勝べ紀計策ハ只ハ八百八人を用るホあゝざれバ。劒ホ做ゝかゝ。ホの義を
ゝく行ゝ者ハ這個大村大角と、大法師ホあゝとゝ。ホの他猶一両人をめて
ゑ紀ゑゝ。機ホ臨て稟上人介ゑホ、大師ハ前月ゝゝ風寒の恙あゝ久ゝく
病休を出ざゝゝホ。両三日已前ゝゝ。痊可を沼ゝゝと雪ゝゝ。召ざ必参

るべ。いそぐべきを先是のことゆゑ義成主黙頭て其為、大と。大角のゆいちろ
ろゆゑ。八百八人とい何ゆゑあらん。敵の大軍ゆ蒐逆んゆ。八百八人を甚寡
ゆ憶ゆる人數のゆゑあらん。信乃大角い文字ゆ富ゆ思ひゆゆ欲いゆゆ道
節壯介。小文吾現八ゆ是を知れりや。甚麼ぞと。問れて大家阿とぞろ。応て
亟ゆ解ゆざりけるそゆ中ゆ道節い卒然と焦燥て。噫犬阪ゆ迂遠ゆ。倍ゆ析ゆ
坐奥ゆ。ゆ謎語をのそゆゆゆゆ疾ゆ。ゆ。ゆゆゆゆゆ。義成主推禁ゆ。ゆゆゆゆ。
道節。計い密山ゆゆゆ好とゆ。何曾々々も亦以ゆ。我もよく考へて。各も考へて。解ゆ
たゆゆ明日報けよ。我又憶ゆ。定正顕定合體して諸方の軍兵を集ゆ。催
促大急ゆゆとても日を累ねゆいゆて。水陸共ゆ全ゆを以ん。然ゆゆ開戦い必
十二月の初旬ゆ在ん。然ゆとて由断ゆゆゆゆ。大士ゆゆゆ當城ゆ止宿して明日ゆ夙ゆ。
衆議聽ゆ参集ひね延命寺へい今日使を遣して、大を召ゆ明日ゆゆゆゆ。又武

者助い明日朝早天ゆ馬を瀧田へ走らゆゆ。這一椿事を老館ゆ告ゆゆゆゆ。汝ゆ親
木曽介及堀内藏人い老宸妃居ゆ勝ゆゆゆゆ。ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ。然て
苦勞ゆ思ゆべけれ我幸ひゆ八犬士あり。又辰相清澄ゆゆの良臣あり。且勇士ゆ匡ゆ
ゆ致仕の老人枕を高ゆ。凱旋の日を俟べ。と偽ゆて慰ゆよ義ゆ通ゆ。疲
労れゆゆゆ卒々俱して退のゆと仰ゆ義通ゆゆゆゆゆ。父君ゆ教ゆを
舒て立ゆゆい七犬士い杉倉直元と俱ゆ言ゆ兼ゆゆ。御曹司ゆ相従て退ゆけり。
徒而其詰朝義成い両家老東六郎辰相荒川兵庫助清澄以下の兵
頭と従へ。厚く衆議聽ゆゆゆゆゆ七犬士も相俱ゆ召れて其席ゆ在り。當下小
文吾信乃現八ゆ。昨日命せられる大江屋依介ゆ買合ゆゆゆゆ船の價ゆ數の
ゆ他ゆ遞與して今朝市河へ遣ゆけるよゆを。ゆゆ上げゆ。却昨日毛野ゆいゆ。八百
八人の義ゆ逮ぶゆ。信乃と大角と莊介い稍解ゆゆゆと云又道節と現八小文吾い

八人の二言を悟るのみ八百八人詳るべきの義成主うち合矣て我も亦當る者違へる欲知ねども辛くして思ひ沿うて各且のおもて俱ふ寫ねし合して見ん料紙硯おのおのいざくといそぐて君臣各書寫おのおのうち合して俱ふ見を見る道節現八小文五吾ハ只火の一字を寫すに又義成主と信乃大角莊れを是則屆火の二字へ道節これをつくる眉と類ひぬ八人を合まれば火字くるのハ論み去風ハ八小従ひ虫ふ従へり故ふ虫ハ八日ふ其卯ふ字と王充ハ論衡ふ云ふ介ると八百の風さるといふそやと難まれば信乃ふ心ふ風の八ふ従ひ虫ふ従ふ勿論ふ古文ハ亦屆ふ作りて八ふ従ひ百ふ従ふ者ヨヨく漢人の隷書ふ在り必疑ひる為べしと解れく道節感服して現八小文五吾共侶ふ及びくと思ひけり是を見ものもの守もあける辰相清澄ハ自餘の諸臣も感じて已む开ぶ程ふ義成主ハ憶まもうち笑れて登ちやと毛野を喚被て軍師乍麼屆火の二字ハ當ら

らむ是ゆく我又悟るとあり量裏ふ那妙椿狸児ぶ八百比丘尼と自稱あける這八百も亦屆ハ他ハ雍尾龍襲の玉とりて屆と自由ふ起あーるふ屆狸の義をあらけるを今ゆ登くふ悟りゆと解示ーゆふを毛野ふ応と共侶ふ大家奇くと稱ける登時又毛野がふゆう那雍尾龍襲の玉ハーも八百八人の計策ふ必是用ふ充要緊ふの東西ふハ多ヒまーくんと思ひひーよ御意のおゆ及べるふ事の成るを兆ふとそハるふ件の玉を今も藏めさせゆる欲、大師の参りるを計策と説ふをべーその折遊與させゆかりふを玉を我成主うち少て那玉ハ今るふ合ゆ出さハ易けれども、大ハ来會さべうもあーゆ其ハ故ハ昨日使を延命寺ハ遣ーて、大ふ徒々とのハせーふ、大ハ辭ひて且ふゆう言不敬ふハへども野納佛門ふ入りーよる未嘗五戒を破らゆ然るを何を必ゆ家人ふ相応ーくふ軍陣殺伐の商量席ふ召れて兼るべを耳ハハるゆ且賤迷ふ痊可ふ却を為とハへども髭髮を剃らゆ頭顱を削らゆ其義ハ御免を被るべ

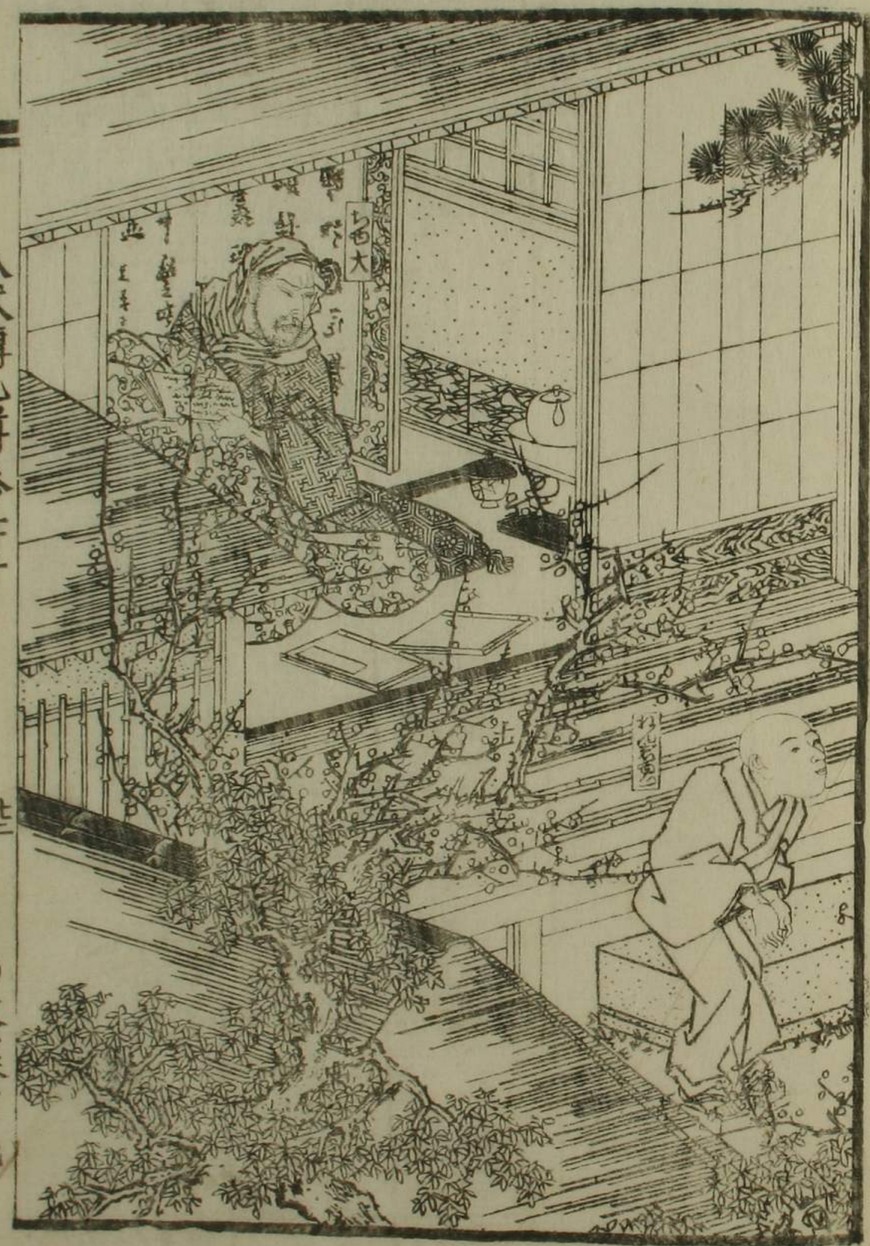
と云強面に答ゆ。えさら。佶れば別人を用ひん歟と問ふを毛野い守あへも否御諚でい
へども那師父と大角ふそ。拙策を紆ひ〻て其故い箇様々々。恁々ふ。と言詳ふ
耳。生れば義成王欽ひて。ちらべ又使を遣して促し迫て迎ん歟否那師父の未
訥る事ふよりて。君命も従ざる所あり。投生戰爭。即是人臣も御使とて今
大角と共侶ふ延命寺ふ赴て。説ば兼服仕らん。猶幸ひるら那師父久く病
着て。髭も頭髮も長く伸て。面痩てこそいるに。ちらべ敵を計ふ妙へ大角ゆい
拙策を既ふ示しふへ早く准備仕ふ。身の暇をゆるねる。敵の大兵五十子へ集
合ぬ前ふ。師父と共ふ。夜ふ紛れて快船ふ乗せく。敵地へ遣まべし。雉尾襲の玉を
賜るべし。と急迫く請へば。大角も毛野ゞ計策を好と稱て。倶ふ行んと稟もも。
義成則その説ふ儘して。雉尾襲の玉を遞與さんとそ。あの義を清澄ふ尋ゆば。
清澄答て然いふ件の奇玉い曩ふ大江親兵衛ゞ稟も義あるふより。臣も預

ア。ちらり。ふ。二ちゐ沼ゞ。ゑ寶ふ佶れば。大士ゞ那八公固の靈玉ふ擬へて且失ひ。ちらん
為ふ毎ふ腰ふ吊てふへば。今もあふ。ひとのひゞく。躰て腰を拷りて表嚢を解く進
らもれば。義成受合ゞ。ちらゐと見てそゞ隨毛野ふ渡しゆば。毛野いゞち戴ゑ。懐ふ
楚と夾め。大角と共侶ふ退り立んとしてけるを。辰相急ふ喚ゞけく。大阪生御使
ふく。延命寺へ赴ゞ。伴當の准備をさせん。騎馬ゆく路次をいそぐちんと。心つれば。
毛野答て否。思ちふへば。伴當ヨゑゑ。反て。ちゐ。騎馬ゆ〻ぎして。悄地ふ行んと
いひゞ。此一退ゑて。却君侯と義兄弟ゞふ。別を告て。大角と倶ふ延命寺へとく
立ふけり。姑且して。辰相い清澄ふ。ゆゞ。寔ふ大士の奇才ゞ。今ちいふい言ゆり
ゆゑれど。就中大阪ゞ。八百八人ゞ至妙。但今番の水戰を。唐山三國の時呉
魏赤壁の故轍ふ據りく。風と火をゆく。謨るとも敵も亦然なりの。利害い前
より知れるゞ。べし。ふの義をいゞふ思ひゆゑ。と問へば清澄沈吟して。然へ。咱ゞも疑ひあ

きども那人脱落あるべくもあらぬ館ハ知せゆゑ、ん、とゆを義成主うち笑く。否
とよ那赤壁の開戦ハ周瑜ガ敵の船を焼けるハ曹操ガ愁ハ冬月ハ東南の
風稀へと思ひ〳〵故へ然るを孔明ガ風を禱り玩と四雑買中ガ演義ハ載れど
陳壽時ガ三國志ハ風を禱るの事なし恐らく那風ハ偶然ゆゑん開ゆ左まれ右
もあれ毛野ハ必胎を奪ひ骨を換る奇計あらん落成を見るハ如とあらじと論
ハ辰相清澄あるを汲く信乃道節荘介現八小文吾等と倶ハ餘談ハ
暨びけり余程ハ大阪毛野亂智犬村大角礼儀ハ倶ハ野服ゆゑ編笠を深く考
伴當才ハ二名を引て悄地ハ白濱ゆ延命寺へ赴玩ハの時、大法師ゆ風
寒の欠安稍癒るゆゑ猶屏坐て方丈ハ在り毛野大角ガ館の御使を奉
アく来ハけりと呼えて名己と名ゆ沙弥念成をゆそ方丈へ迎入さく開ガ儘ゆく
對面ゆ登時毛野ハ大角と倶ハ上坐ハ着てゆゆゆ師父貴ハ平安ゆる狄昨日ハ

軍旅の事ハ就て館の召さゆゑ〳〵ハ師父ハ云云と難義を舒て汲参りゆゑ〳〵
猶尊命を偽ん為ハ我們御使ハ参りゆ一霎時左右を遠さけゆゑとゆを
〳〵大いゆ呼て然へ出家人ハ相応しゆゆ軍陣の事ゆゆ再命ゆ義ゆハ及ゆ
且左右ハ人あゆゆ只這念戍のゆ他ハ腹心の徒弟ゆ侍ゆ〳〵ゆ
茶をゆゆ出せよといゆゆ念戍ハゆゆ退ゆ姑且ゆ大角ガ〳〵ゆ
師父ハ未ゆ知りゆゆゆ那扇谷の管領ゆ我們を憎むの故ハ今番山内顕定
主と和睦ゆ且諸侯を連ゆ大軍をゆ水陸ゆ當家を伐ゆゆ実ハ是
危宥存亡の秋へゆをゆて館ハ宵ハ衣盱食軍議ハ暇ゆゆ則犬
阪を軍師ハゆされ犬塚以下我們を御使ハ做されゆ且師父を請て謀計を示
ゆく欲しゆハ御身の欠安ハ癒ゆゆ渋て参りゆハ抑泰れる狄將衍ぜる
狄縱出家人ゆとても其國ハ居て其國の亡るを外ハ見ハ不忠不義の罪免

けの野大角
延命寺の方
丈わ造ゆ
丈く
けの


ちも大

るべくぞ。汝も亦釋迦の教を欲と詰るを、大いに悔あべき。然と我い庸常なる出家人と同じからず。命の御恩をうけまも。両館の御為ふ毎ふ真福を祈るこそ我職分とぶべけれ。當番編小とぶと雖賢臣勇士ふ匹ーなら函ふ。這回い何ぞ人ふ比如く軍旅の事ふ要るる函ぶ。出家人を然う席へ召るまで何ふるれん。薦る者の互ひ思ひもうけぬ事ふとと。弊ふを毛野い推禁ふめそ。師父いと憚りある言ぶぐ。ろん身いぶ其一を知ていまぐ其二を知らぬ。敵い水戰を上日とーく。數百艘の艨艦を連ね渡ーて伐まく欲まもの。既ふ呼ぶえる。其敵船を拗ぐい風と火ふ乗く者あーぞ。然ば敵の與ふ風を起まも。這筭計を行ふ者今師父ぶ外ふ人ふ。支甲由日を身ふ擬ひ馬ふ跨り弓を舞ーて敵を伐と課ぶば。出家人ふ似げ子と推辭ぬふも理りるるむ只君の為民の為ふ貌を殊ふ名を隱ー敵を欺ひて風を祈らば。是善巧方便まて妄語の一戒を破るふあるぞ。ふの義を思ひ免ぐ。と説れて、大い沈吟

ふて。そも然う情由もあるべけれども風を起ーて。其風所以ふ船を焼て敵を亡さば。親人を殺ふ同じ。非如頭顱を刎らるとも然う殺生をよくせんやとのよく固辭く听ざりふを。大角徐ふ論まるる。師父の主意何ぞ不肖せる。其風をもて敵と破るを殺生ーて。嫌ひあるべ。大敵利を得て渡ーー来て城を拔ひ人を屠ら。然ば師父の心單すぐ。自家の士卒千萬名を。自殺ーぬふ同じ。利害損益ふの舉ふ於て何の道ぞ。免るべくぞ。恁れぞ敵を害ざると。御方の戰ひを帮助ると。其功德孰そ。其風を起まの故ふ敵を殺まの嫌ひあるべ。凱旋の後水陸道場りく。敵の菩提を吊ひあるべ。欲ぶて皆清果を得ん。夫生ある者い必死あり。死ーて活佛の引道を受ん。ふの義を疎ひ千慮の一失狹と理り逼る。両才子の意見ふ、大い困ー果て黙然ぐること半晌許。思ひ復ーうち頷ひく。ああうん。是非ふ及ぶ。我其筭計ふ從て。左も右もべけれども我法力をいふーく。風を起まを支をよくせん。ふの義什麼と訝ら

と問へば毛野い咲く懐よろ。雍龍襲の玉を。嚢の俣ゆ出して、大ゆ示ーくゆゆう。師父先是を見ゆひ。ゆゆ嚢ゆ妙椿狸児が風を起ゆー奇貨を。那雍龍襲の玉。印是ろ。然ゆ是をのて招くと云ゆ東西南北思ひの隨ゆ効風を起さえ。投ゆ素をうーく。ゆ易ゆ。故ゆ館ゆ乞ゆて。推乃来て。師父の所用とも。我謀る所ゆ固様々々。徒ゆ悠ゆひとを。具ゆ説示ーて又ゆ云ゆ。師父ゆ今宵烏夜ゆ紛れて。悄地ゆ六角と共侶ゆ。柴濱ゆ推渡ゆ。權且谷山ゆ躯れ住りて。異日件の筭計を紛ゆ勿論當山の衆徒ゆ寄隊を調伏の祈禱の為ゆ三七日富山の品山屋ゆ籠ゆと云て立出ゆ。ゆの餘の准備い箇様々々。とゆろゆさゆろ。雍龍襲の玉を遞與ゆ又大角も俱ゆ額を良ゆ。密談ゆ日を消ーけゆ。畢竟ゆの夜、大大角ゆ悄地ゆ快船ゆうち乗て俱ゆ武藏の柴濱ゆ推渡ゆて後の話説甚麽ゆ。ゆ八下回ゆ。解分ゆを聽ゆかー。

南總里見八犬傳巻之五十二終

○八犬傳第九輯下帙下中編乙號上分巻五冊書画剞劂目次

出像

柳川重信畫

補助画　巻之三十一末ヨリ　歌川貞秀

淨書　巻之二十九　谷金川

巻之三十　澤金次郎

巻之三十一上　朝倉伊八

巻之三十一下　常盤園

巻之三十二　鏤近吉

澤金次郎

彫工

○曲亭翁新舊著編畧目　書林　文溪堂藏版

八犬傳第九輯下帙下乙號下編　分巻十冊當冬推續出販全部九十一冊大團圓ゆ至りゆ

あさ花新書　中本第一編第二編各五冊○翁の中本の作ゆ文化以来久ーくるゆーを本房强て乞求めるてゆろゆあの作ゆ初編三冊引續き近日出販仕ゆ

開卷驚奇俠客傳第五輯　作者年々八犬傳の著編ゆ餘筆ゆ暇ゆくあの書中絶の処近日稿成く出販遠ゆ保ゆるゆくぞ

菅聖廟画傳記 古人北尾重政画全五冊○右の書享和中翁の舊作なり故あて久〳〵刊行ぜざりしを本房求得て新板とせ近日發行

近世説美少年録第四集 右の書も使客偽と同筆にて甚〳〵中絶せんとせしを急促して遠〳〵出板延引せんを出板延引在り

著作堂一夕話 是ハ翁の隨筆之初集大本三卷近刻○嚮ふ書目録ふ

玄同放言 瀧澤八翁隨筆大本六冊○右の書本房の藏板ふるりしより佳紙精製年々ふ〳〵る書目録ふ載号を記せ〳〵翁の本意ふわるまじきは也因て今改之

○家傳神女湯 婦人ちのさわり 紙病の妙薬一包代百銅

○精製奇應丸 大包代金貳朱 中包代一匁五分 小包代五ト

○熊胆黒丸子 一包代五ト

○婦人つぶ虫の妙薬 一包代六十四文

製薬本家 四谷あるのとの町 瀧澤氏

弘所 元留町中坂下南側四ツみち店高 ゆ之ゑ氏

八犬傳九輯下帙の下ハ本編の冒端ふ作者の自注ふ如く五卷まで結局ふ成らざる故ふ十卷を分卷十五冊ふ〳〵三編ふ生じ必ずもその次の十冊も當冬出販一部九十一冊程ふ全壁仕の但九輯の末ハ作者始よりふて出必局を結んと思れふ故ふ帙數多く成り帙の名目もれ是迄後々ふ成ふ不ふ折ふ紛らはしく必ん依之全本揃ふ九輯より順ふ十七輯まで改正て仕ふそれまでふ矢張九輯の下帙の下乙号上中下三編とあるうち〳〵ふ且鴈皮紙摺り全部ふ相入合本も有る通ふ仕ふる孰も追々ふ求めを維奉祈ふ 板元書林文溪堂

○御薬わすれ仙女香 一包四十八文 黒油美女香 一貝四十八文 ゆ之京橋南傳馬町坂本氏

○金匠救命丸 一粒三十二文 大包中包小包有 本御林氏製 弘所 丁子屋平兵衛

大阪 河内屋喜兵衛 同 伊丹屋善兵衛 同 敦賀屋九兵衛 同 秋田屋太右ヱ門 同 河内屋茂兵衛 同 河内屋和助 同 秋田屋市兵衛 西京 出雲寺文次郎 同 村上勘兵衛 同 勝村治右衛門 杉本甚助

東京 須原屋茂兵衛 同 山城屋佐兵衛 同 小林新兵衛 同 丸屋善七 同 和泉屋市兵衛 同 須原屋伊八 同 出雲寺萬治郎 同 梳屋喜兵衛 同 近江屋半七 同 長門屋龜七 同 三家村佐平

名山閣 東京芝大神宮前書舗 和泉屋吉兵衛發售